

VERA

Tokyo Woman's Christian University



SPECIAL FEATURE

東京女子大学学位授与式 学長告辞

一時代に抗して信仰と希望と愛の挑戦を一

学長 森本 あんり

東京女子大学を卒業する皆さんへ

東京女子大学学位授与式 学長告辞

―時代に抗して信仰と希望と愛の挑戦を―



学長
森本 あんり
MORIMOTO Anri



皆さんが大学生活を送ったこの4年間は、戦後80年の歴史の中で、とりわけ戦争の多い4年間となりました。小さな紛争はそれまでもありましたが、世界秩序を大きく揺れ動かすような国と国との戦争が始まったのは、まさに皆さんが入学した4年前のことです。今日のこの学位授与式には、今もそういう戦争が続くウクライナからの学生も列席しています。人々は、高度に発達した民主主義の国が、戦争などという愚かな選択をするはずはない、と信じていたのです。今となっては、そのような楽観こそ愚かだった、と言わなければなりません。

国際情勢に押されて、国内でも大学教育への視線が厳しくなりました。日本は他の先進国と比べて、労働生産性において大きく遅れを取っている。先端技術の開発もなく、国際競争力も落ちている。そしてその原因は、大学教育だ。特に、理系の学生が少ないことが問題だ。そういう政府の掛け声で、今日の日本の大学は、大きく様変わりしようとしています。

歴史をふり返れば分かるように、それは、日本が繰り返したどってき道です。明治時代には、文明開化と富国強兵です。第二次世界大戦の時には、有用な理系学生を残すために、文系の学生から徴兵されて戦地へ送られてゆきました。東京女子大学は1918年に開学しましたが、戦争中はキリスト教の大学として、また戦争の遂行に不要な女子の教育をする大学として、軍部の批判を受けます。「専門学校なのに大学であるかのごとき名称を看板にしているのはけしからん」と言われ、やむなく「東京女子専門学校」という名前になりました。

人間の軸を定めるリベラルアーツ

だからこそ本学は、戦後に新制大学として再出発した際にも、国家の要請に従うだけではない、独自の教育目標を掲げたのです。時代がどのようになろうとも、人間として、変わらない真実を求め続ける姿勢を持ち、独立した知性と人格を持つ女性となってほしい。それが、皆さんが卒業する、この東京女子大学の教育です。

本学が一貫して掲げるリベラルアーツ教育も、戦争の反省から生まれたものです。19世紀にドイツで研究大学が興隆すると、その成果に目を見張った各国は、競って科学の振興策を定め、専門教育を推し進めるようになります。その結果が二つの世界大戦でありました。リベラルアーツは、行き過ぎた科学偏重を是正し、人間や文明について批判的な考察を行い、良識ある市民として政治に参加する感性を養う教育です。それが、「知識より見識、学問より人格、人材より人物」と語った初代学長、新渡戸稲造の建学の精神でありました。

未完成の歴史を生きる力

先行きの不透明な時代に、足元をすくわれずに生きてゆくためには、どこかにしっかりと人間の軸を持つことが必要です。「すべて真実なこと、すべて正しいこと、すべて愛すべきこと。」そんな聖書的美辞麗句は、この時代にはいかにも頼りなく感じられるかもしれません。それでも、覚えておいていただき

たい。人間として、女性として、いつか自分が試される大きな機会に、この言葉があなたを生かす力を与えてくれます。

本当に真実で美しいことは、この世の歴史の中では完成しません。だからわたしたちは、信仰によって救われるのです。本当に価値のあることは、人間の一生の間には実現できません。だからわたしたちは、希望によって救われるのです。本当に徳の高いことは、一人だけで成し遂げることはできません。だからわたしたちは、愛によって救われるのです。信仰と、希望と、愛。そして、使徒パウロが言うように、そのうちもっとも大いなるものは、愛です。

どうか、平和の神が、あなたがたと共にいますように。神の愛と恵みと慈しみが、卒業生一人ひとりの上に、豊かに注がれますように。卒業、おめでとう。✠

2025年度末 現代教養学部卒業生

卒業生数	947名	関根 愛果
学科代表	国際英語学科	福田 友理
	人文学科	森 向日葵
	国際社会学科	近野 楓
	心理・コミュニケーション学科	島村 美美子
	数理科学科	

2025年度末 大学院修了生

修了者数	博士前期課程：25名
	博士後期課程：3名

学びを終えて 学部卒業生のメッセージ

言葉が拓いた視点

国際英語学科 国際英語専攻

田中 杏奈 TANAKA Anna

国際英語専攻は、英語の枠を超え「言語」そのものへの興味を幅広く探究できる環境であった。専攻での学びから関心は日本語へ広がり、日本語教員養成課程を履修した。多くのご縁に導かれ、アイルランド留学や、アメリカの小学校でのインターンシップ、インドネシアでの文化交流事業・日本語教育活動など、貴重な経験をすることができた。大学院でも多角的に文化を捉える視点を持ち、積極的に実践の場に赴き、学びを深めていきたい。



インドネシアにて、先生や生徒と共に。筆者は前列中央

哲学の面白さ

人文学科 哲学専攻

橋本 遥 HASHIMOTO Haruka

演習形式の授業ではアウグスティヌスやウイトゲンシュタインの著作を少人数で読み進め、疑問点や文の解釈について議論を重ねた。独特な比喻や例をどう捉えるかを突き詰め、真剣に話し合える環境に身を置けたことは、私にとって大きな幸福であった。アウグスティヌスが仲間と過ごしたカシキアムでの日々のような、夢中になって真理を探究した4年間の経験を胸に、これからも他者や自分の疑問を大切に生きていきたい。



大谷先生と哲学オフィスで。筆者は中央

価値観の交差点

国際社会学科 社会学専攻

末岡 美樹 SUEOKA Miki

社会学専攻は、良い意味で皆バラバラである。バラバラな価値観を持っているからこそ、他人の価値観を尊重し理解しようという姿勢がある。世代間交流の社会的意義を調査した卒業論文では、若者と高齢者の交流がもたらす効果について、ゼミ生に協力を仰ぎながら実際に交流の場を設け、多角的な観点から意見を収集することができた。専攻での学びを通して、自分の視座を相対化し、多様な価値観と可能性を自ら見いだせる人でありたい。



卒論調査に協力してくれた流王ゼミの仲間との旅行。筆者は中央

友人たちとの4年間

国際社会学科 コミュニティ構想専攻

安田 日菜乃 YASUDA Hinano

入学前は何を学びたいか定まっておらず、幅広く学ぶことができると考えコミュニティ構想専攻を選択した。入学後はさまざまな授業を履修していく中で、観光を通じた地域活性化に興味を抱き、学びを深めていった。ゼミでは同じ「観光」でも友人たちの関心がそれぞれ異なり、考えに触れるたび視野が広がった。友人たちに支えられ、また切磋琢磨し4年間多くの学びを得ることができた。本学で培った常に学ぶ姿勢を忘れず、社会で活躍していきたい。



一緒に過ごした友人たちとの写真。筆者は左端

問いを手放さずに

人文学科 日本文学専攻

窪川 葵 KUBOKAWA Aoi

文学を通して言葉と向き合い続けた大学4年間だった。『源氏物語』の演習やゼミでの学びを通して、言葉は意思を伝えるだけでなく、問いを生み出す力を持つものだ実感した。作品を丁寧に読み込み、生じた疑問を追究し、議論を重ねる中で、答えを考え続ける姿勢が身に付いた。文学は、簡単に結論を与えてくれないからこそ、思考を深めてくれる学問だと学んだ。この学びを胸にこれからも問いを手放さず、言葉と向き合っていきたい。



今井先生、TAの大槻さん、ゼミの仲間と。筆者は中央列左端

のびのびと歴史学を

人文学科 歴史文化専攻

守屋 京奈 MORIYA Keina

専攻主催の「ドイツ・ヨーロッパ研修」に参加した経験から、入学前には想定していなかったテーマで卒業論文を執筆した。難しいテーマだったが、柳原先生をはじめとする専攻の諸先生方や、同期の支えによって形にすることができた。入学前に掲げていた全ての目標を在学中に達成することができたのは、少人数で落ち着いた美しいキャンパスでのびのびと学べたからである。新たな環境でものびのびと学び、考え続ける人間でありたい。



ドイツ・ヨーロッパ研修の様子

人を学び、人に支えられた

心理・コミュニケーション学科 心理学専攻

渡邊 香苗 WATANABE Kanae

心理学を学ぶ中で身近な対人関係に興味を持ち、社会心理学のゼミを選択した。3年次から英語論文の読解や、心理学実験に取り組みながら自分が何に関心を持つのか模索した。卒業論文では「表情模倣」について研究を行い、実験計画や論文執筆においては工藤先生に多くのご指導を頂き、仲間と協力し合いながら執筆を終えることができた。さまざまなことに興味を持ち、時には困難に直面しながらも努力し続け、学びを深められた。



ゼミでのポスター発表会にて。筆者は前列右から2人目

出会いから共創へ

心理・コミュニケーション学科 コミュニケーション専攻

柳澤 奈央 YANAGISAWA Nao

コミュニケーション専攻での4年間は、多様な他者と出会い、向き合った時間であった。ゼミでは視覚障がいのある方や地域の高齢者との交流、中国残留邦人の語り部の方の話を通して、身近な多文化社会を学んだ。卒業論文では視覚障がい者や高齢者、留学生が一堂に会し身体表現を通して交流する場を実践し、共に創る喜びと相互理解の可能性を探究した。この経験は、これから社会と歩んでいく私の確かな土台となっている。



卒業論文ワークショップの様子

国際関係を現場で学ぶ

国際社会学科 国際関係専攻

呉 恩愛 O Une

大学生活の学びは、国際関係専攻で政治・経済・法など多様な領域から国際社会の仕組みを体系的に学んだことに始まる。文化人類学ゼミでは、開発途上国における格差をテーマに、カンボジアでのボランティア活動を通じたフィールド調査から国際課題を多角的に捉える視点を養った。理論と現場を結び付けて考え、「当たり前」を問い直す姿勢を身に付けた。卒業後も国際関係への関心を持ち続け、社会と向き合っていきたい。



カンボジアの小学校にブランコを建設している様子

身近になったエコノミクス

国際社会学科 経済学専攻

西 咲良 NISHI Sakura

専攻では、身近な出来事から世界で起こっている経済の問題まで幅広く学び、物事を筋道立てて考える力を養った。ゼミでは「沈黙は厳禁なり」という先生の言葉の下、毎週のプレゼンや議論を重ね、自分の考えを言葉にする力を身に付けてきた。仲間と意見を交わしながら学ぶ日々は、学びを深めると同時に、学生生活を充実したものしてくれた。東女で培った経験を土台に、これからも自ら考え、判断し、社会に貢献していきたい。



長谷川ゼミの仲間と。筆者は右

数学が拓く進路

数理科学科 数学専攻

新國ゼミ Nikkuni Seminar

新國ゼミでは、「結び目理論」と呼ばれる図形の分野を扱った。内容は難解だったが、疑問点は全員で共有し納得するまで取り組んだ。先生との距離も近く、ゼミのアットホームな雰囲気も心地良かった。数学を通して得た論理的な思考や柔軟な発想、考え抜く力を生かし、企業への就職・教員・大学院進学など各自自分に合ったさまざまな進路を選択した。4年間の学びを忘れず、この先も思考し続けたい。



ゼミ中の大切な糖分摂取タイム。左から、北井百合、曾根原瑠乃、島村美美子、池田悠莉、高萩涼音、榎本千夏

問い続けた4年間

数理科学科 情報理学専攻

青江 あかり AOE Akari

情報や自然科学の分野を中心にプログラミングや数理的思考、3D表現や機械学習など幅広い分野を横断して学んできた。授業だけでなく研究活動にも取り組み、自ら課題を設定し、試行錯誤しながら形にしていけることができた。また、専門分野にとどまらず他分野の知識や視点に触れることで物事を多角的に捉える重要性を学んだ。大学で得た主体的に学び探究する姿勢を大切にしながら、今後も新しい技術や表現に挑戦していきたい。



研究合宿の様子。筆者は右から3人目

Students

学びを終えて 大学院修了生のメッセージ

同期との出会いに感謝

人間科学研究科 人間社会科学専攻 博士前期課程(臨床心理学分野)

堀江 結衣 HORIE Yui

大学院で得た最大の宝は、間違いなく同期の存在である。修士課程の2年間は、課題や実習に追われ、何度も心が折れそうになった。実習では、実際に心理的な支援に携わる責任の重大さに押しつぶされそうになり、自分の未熟さに落ち込むこともあった。また、社会人として働く友人と自分を比較して、劣等感に苦しむ日もあった。そんなとき、本音で語り合い、寄り添ってくれた同期がいたからこそ、めげずに前を向き続けることができた。同期に支えられ、助けられた2年間だった。この出会いに心から感謝している。本当にありがとう。



同期との思い出の1枚。筆者は左から3人目

学びの日々に感謝を

人間科学研究科 人間文化科学専攻 博士後期課程(言語表現文化領域)

大槻 栞 OTSUKI Shiori

中学校の図書館で手に取った玉上琢彌訳注『源氏物語』との出会いから、平安時代文学への関心は深まり、東京女子大学にて11年学んだ。振り返ると、この歩みは一人の力によるものではないと心の底から思う。指導教員である今井先生は、どのような時も研究者としての私を信じ、特に研究に向き合う姿勢そのものについて、真摯なご助言を重ねてくださった。専攻の先生方や研究室、大学職員の皆様、そして家族や友人など、これまで支えてくださった全ての皆さまにも、この場を借りて心より感謝申し上げたい。本学で学び得たことを多くの人に還元していけるよう、今後も努力を重ねていきたいと思う。



今井先生、院の後輩と。筆者は左から2人目

博士後期課程で学んで

人間科学研究科 人間文化科学専攻 博士後期課程(思想文化領域)

松本佳菜子 MATSUMOTO Kanako

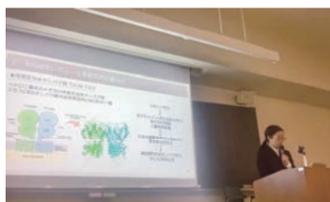
中学校の教員として教壇に立つ中で、生徒の学びの体験がどのような意味を持ち、どのように成り立っているのかということを知りたいと感じながら、それを形にすることの困難も感じていた。そのような時に東京女子大学にご縁をいただき、社会人学生として博士後期課程に入学した。研究を進める中で、生徒たちの体験とともに、自分の研究の意味と位置付けが明らかになっていったことは、とても楽しく興味深い体験だった。このような体験が得られたことは、やりたかった研究ができたこととともに、博士後期課程で学んだことの意義だと感じている。

人生の財産

理学研究科 数理科学専攻 博士後期課程(応用数理学領域)

荒木 貴絵 ARAKI Kie

私は学部4年次から6年間、味覚受容体タンパク質に関するシミュレーションとその解析を行ってきた。理解の及ばない部分も多く、自分の未熟さと闘いながらの研究生活ではあったが、安藤先生や研究室の仲間との議論を通して、非常に多くのものを得られたように思う。それだけでなく、これまでの人生の約3分の1である9年間をこの東京女子大学で過ごしたことは、自分の価値観や生き方にも大きな変化をもたらした。お世話になった安藤先生をはじめ、私の学びを支えてくれた全ての人に、心からの感謝をささげたい。



博士論文公聴会の様子

博士後期課程修了者—博士論文

人間科学研究科 人間文化科学専攻 博士後期課程(言語表現文化領域)

大槻 栞 OTSUKI Shiori

『源氏物語』における侍女について—乳母と後見を中心に—

人間科学研究科 人間文化科学専攻 博士後期課程(思想文化領域)

松本 佳菜子 MATSUMOTO Kanako

授業における生徒の多様な体験の現象学的研究—授業観察と授業記録に基づく授業の可能性の探究—

理学研究科 数理科学専攻 博士後期課程(応用数理学領域)

荒木 貴絵 ARAKI Kie

Study on Ligand Recognition Mechanism of Taste Receptor Proteins T1r2a-T1r3 Based on Molecular Dynamics Simulation (邦訳:分子動力学シミュレーションに基づく味覚受容体タンパク質T1r2a-T1r3におけるリガンド認識機構の解明)

◎光明照子賞

国際英語学科

国際英語専攻 六條 ゆず

人文学科

哲学専攻 青木 彩恵
日本文学専攻 舟津 和香
歴史文化専攻 栗本 歩夏

国際社会学科

国際関係専攻 田中 亜美
経済学専攻 武田 理佳
社会学専攻 岡本 麻佑
コミュニティ構想専攻 黒木 桜子

心理・コミュニケーション学科

心理学専攻 金丸 桜子
コミュニケーション専攻 中川 百々果
数理科学科
数学専攻 曾根原 瑠乃
情報理学専攻 高原 悠加

◎比較文化研究所賞

富岡 有羽 国際英語学科 国際英語専攻
A Study of the Translation of Daniel Sosnoski's *Introduction to Japanese Culture*

相川 咲良 人文学科 哲学専攻
「笑い」の哲学

松崎 未奈 人文学科 日本文学専攻
『天地始之事』研究

氏家 未夢 人文学科 歴史文化専攻
古代地中海世界における月桂樹

小野 紗希 国際社会学科 国際関係専攻
新自由主義と女性運動

伊藤 なお 国際社会学科 経済学専攻
イスラム金融のグローバル展開と課題

向山 可織 国際社会学科 社会学専攻
国際結婚によるジェンダー観の変化—魅力化される都市型結婚—

市川 菜 心理・コミュニケーション学科 コミュニケーション専攻
東京・大阪の対人行動比較—「地域人らしさ」ステレオタイプと対人行動選択の相互構成—

◎女性学研究所賞

武野氏 未栞 国際英語学科 国際英語専攻
A Study of Edith Wharton's *Summer: Romance and Women in the Early Twentieth Century*

望月 咲子 人文学科 日本文学専攻
明治文学における「女学生」表象—男性作者と女性作者による作品を比較して—

畔上 咲月 人文学科 歴史文化専攻
植民地期朝鮮の女性—絵葉書から見る妓生のイメージと存在の変容—

田上 陽菜 国際社会学科 国際関係専攻
日本における月経観と生理用品の誕生

越智 咲月 国際社会学科 経済学専攻
職場の制度運用とジェンダー—働き方制度の運用実態と女性活躍・人材定着 CSR企業総覧100社の分析

小平 真優 国際社会学科 社会学専攻
女性のライフコースにおける都市と農村

黒木 桜子 国際社会学科 コミュニティ構想専攻
パートナーシップ制度をめぐる当事者と様々な主体とのかかわり—世田谷区パートナーシップ制度設立過程から現在までの10年に着目して—

篠 百花 心理・コミュニケーション学科 コミュニケーション専攻
わたしを演じるわたし—女子大学生の語りにおけるSNS時代の自己モノ化とフェミニズムの可能性—

学長賞

文化・芸術活動 八木 梨菜 人文学科 歴史文化専攻 3年
日本リアリズム写真集団第50回公募写真展「視点」において、ヤング賞に入選。

串田 美玖 心理・コミュニケーション学科 コミュニケーション専攻 3年
第12回Live2D Creative Awardsにおいて、世界20の国と地域、160件以上の応募からファイナリストに選出。

社会貢献活動 高萩 涼音 数理科学科 数学専攻 4年
阿佐ヶ谷で「駄菓子×居場所みと商店」を個人で立ち上げ、多世代交流の場所づくりを目的とした活動を開始し、地域住民にとってのサードプレイスとして機能させたことが評価された。

Career

TWCU OG TALK

◆ 卒業生インタビュー ◆ Vol.18

卒業後も学び続け、仕事をする上で必要な知識を身に付けると同時に、ライフステージの変化で得た新たな視点を生かして自分の力に変えていく、そんな卒業生からのメッセージをお届けします。



横浜市役所
財政局 財政部 財政課

小泉 晶子さん

KOIZUMI Akiko

2021年度現代教養学部国際社会学科コミュニティ構想専攻卒。矢ヶ崎ゼミに所属し、国際会議をはじめとしたMICE(国際会議等の総称。M: Meeting, I: Incentive Travel, C: Convention, E: Exhibition/Eventを表す)に関する国の施策や自治体の誘致施策等について学ぶ。卒業後、横浜市役所に入庁。財政局財政部財政課にて担当部署の予算の編成および執行管理を主に担当。

地域の今と未来を支える 財政の現場で

私は横浜市役所の財政局財政部財政課に所属し、担当部署の予算編成および執行管理を担当しています。所属する課は内部行政を中心とする部署であり、市民の皆さまから直接見えにくい仕事ではありますが、市として最適な予算を形にする重要な仕事です。予算審査をする立場上、市全体の収支を統括する財政課と施策を充実させたい担当部署との意見が一致しない場面もありますが、現場の声や実情を理解し、市民の皆さまのニーズに応える施策とするため、日ごろから丁寧なコミュニケーションを心がけています。その上で、持続可能な市政運営の実現に向けた財政運営につながるよう、予算編成に取り組んでいます。これまでの積み重ねを翌年度予算案として对外公表したときや、議会で予算が承認されたのち、市民の皆さまに施策が届いたことを知ったときにやりがいを感じます。

横浜市役所に入庁した背景には、身近に公務員がいたことに加え、「大好きな地元である横浜を基盤に暮らしたい」という自身の思いがありました。そして、大学時代のコミュニティ拠点実習で、横浜市で開催された第7回アフリカ開発会議を題材に調査を行い、市職員へのインタビューを通じて「この人たちと働きたい」と感じたことが、入庁の決め手となりました。

在学中はコロナ禍という制約の多い環境でしたが、質問票を用いた調査やリモートでのヒアリングなど工夫しながら卒業論文や実習報告書を完成させた経験は、困難な状況でも最適解を導き出す力の獲得につながり

ました。大学での学びを通して現在の仕事に特に生きていくと感じる姿勢は、「正解のない問いに対して、自らの答えを持つこと。そしてそれを他者と議論すること」です。予算編成は明確な正解がないため、自ら考えた上で上司と検討し、一つの答えを導く必要があります。前例にとらわれない解決策が必要な場面において、課題と向き合い、さまざまな立場から考え、検討する力や姿勢はリベラルアーツの学びが非常に役立っています。東京女子大学で培った力があつたからこそ、これまでの困難を乗り越えられたと実感しています。

今後は区役所窓口など、より現場に近い部署も経験しながら、行政のジェネラリストを目指すべく努力していきたいと考えています。仕事以外では、同窓生との交流や書道が続けながら、大学で得たご縁と学びを大切に、挑戦を続けていきたいです。

在学生の皆さんは、ぜひ自分のやりたいと思うことにたくさん挑戦し、さまざまな場面で出会った方とお話する機会を大切にしてください。その一つ一つの経験が必ず今後の自分の糧になってくれることと思います。



横浜港 大さん橋にて撮影

就職内定者 INTERVIEW

学生記者担当ページ

1年次・2年次の学生記者が、就職活動の進め方や疑問について内定者の先輩たちにインタビューします。

心理・コミュニケーション学科 コミュニケーション専攻 2年
廣瀬 ゆら HIROSE Yura
心理学科 1年
高橋 日菜 TAKAHASHI Hina

内定者

心理・コミュニケーション学科 コミュニケーション専攻 4年

大槻 凜さん OTSUKI Rin

日本航空株式会社に内定

国際社会学科 社会学専攻 4年

神山 璃湖さん KAMIYAMA Riko

ソニー・ミュージックグループに内定

就職活動の全体的なスケジュールを教えてください。

大槻さん 3年次の4月からキャリア・センターの「就活ゼミ」に参加しました。その頃から自己分析や企業研究を始め、就活中は継続して取り組みました。夏はSPIやTOEIC®などの対策を進め、本選考直前は面接練習や企業研究に力を入れました。

神山さん 2年次の3月から3年次の4月にかけて、自己分析と企業分析を行いました。7月には就職活動に慣れるため、選考時期の早いベンチャー企業を受けました。12月・1月に冬インターンに参加し、2月に1社目の内定を頂きました。その後、エンタメ企業に絞って就職活動を進め、6月に就職活動を終わりました。

キャリア・センターはどのように利用していましたか。

大槻さん 3年次の春に初めて利用しました。キャリア・センターには航空業界出身のキャリアカウンセラーがおり、エントリーシートの添削や、実際の面接を想定した練習をしていただきました。不安なことや心配ごとは何でも相談していました。

神山さん 3年次の4月から5月頃に利用を始め、主に面接練習でお世話になりました。また、キャリアカウンセラーと面談を行い、就職活動中の悩みや進路への迷いについて相談しました。具体的な答えを示してくれるわけではありませんが、話を聞いてもらえる存在がいることで気持ちが整理され、不安が軽くなったと感じています。

就職先を選んだ決め手を教えてください。

大槻さん 幼少期から憧れていた航空業界を志望し、複数の企業から内定を頂きました。その中でも日本航空の選考では、最もありのままの自分でお話することができました。自分の言葉で、

気負わずに思いを伝えられたからこそ、ご縁を感じ入社を決めました。

神山さん ソニー・ミュージックグループに入社を決めた理由は、私自身の就活の軸である「チームでたくさんの人の心を動かしポジティブを生み出す」ことが実現できると思ったからです。また、面接時のやり取りがとても楽しく、フィードバックをもらったことも印象に残っています。一人ひとりをしっかり見てくれていると感じ、この会社で働きたいという気持ちが強くなりました。

自分の強みや「ガクチカ」(学生時代に力を入れたこと)はどのように見つけましたか。

大槻さん 自分の強みは、周りとは比べたときに初めて気付くものだと思います。自分では当たり前に行っていることが実は強みである場合もあるんです。「ガクチカ」については、成し遂げた結果よりもきっかけや行った過程を大切にしました。どんなエピソードを話す場合でも、企業に合わせた着地になるように意識しました。

神山さん 最初は自分の強みがまったく分かりませんでした。自己分析サイトや他者分析も試しましたが、しっくりきませんでした。しかし、人に聞いたり、ES(エントリーシート)を書いたり、試行錯誤を重ねる中で、少しずつ自分の強みが見えてきました。いろいろな方法を試していくことで、自分なりの強みを見つけられると思います。「ガクチカ」に関して大切なことは、自分が自信を持って話せるエピソードを選ぶことです。内容が良くても自信がない話し方では、面接官の心に響きにくいと感じました。また、困難に直面したときにどのように乗り越えたのかが伝わる、再現性のある「ガクチカ」が重要だと思います。

編集後記

おふたりとも、私たちの質問に親身になって丁寧に回答してくださいました。先輩方の姿から、ありのままの自分であることこそが就職活動を成功させる秘訣なのではないかと感じました。自信にあふれたまなざしが非常に印象的でした。(廣瀬)今回初めて学生記者を経験し、緊張しながらも多くの学びを得ることができました。企業選びや「ガクチカ」、強みの見つけ方などの実体験に基づくエピソードを伺い、非常に参考になりました。今回の取材で得た学びを、これからの就職活動に生かしていきたいです。(高橋)



貴重なお話をありがとうございました！
(上段左から高橋さんと廣瀬さん、下段左から神山さんと大槻さん)



第17回

A Window Into Language Learning

英語圏文化専攻 橋本ゼミ

Second Language Acquisition (SLA) is a research field that explores how people learn additional languages and how languages are taught. Although it is often associated with English, SLA is not limited to a single language. SLA asks broader questions, for example, how learning environments shape outcomes, how multilinguals communicate and code-switch (alternate between different languages), and how social experiences influence language development. I take an interdisciplinary approach in my research by drawing on different theoretical frameworks. Drawing on SLA alongside sociology, human rights studies, and research on identity, I examine language learning and teaching as social practices rather than purely cognitive processes. I am particularly interested in bilingualism, migration, and inequality, and in how language classrooms reflect broader social structures. From this perspective, learning a language is not only about acquiring grammar or vocabulary, but also about negotiating identity, emotion, and power. These ideas are the foundation of third- and fourth-year courses in English language education that I teach.

入門コンテンツ

Lightbown, Patsy; Spada, Nina (2022).
How Languages are Learned:
Fifth Edition.
Oxford University Press.

This book is suitable for English education majors because it provides a clear, research-informed overview of how languages are learned. It can help students connect theory to real-life learning experiences and classroom practice.



Third-Year Research Writing

In Third-Year Research Writing, students are introduced to SLA research, work critically with academic sources, and learn academic writing conventions. They explore topics such as the use of learners' first languages in second-language classrooms, translanguaging, and attitudes toward English. Students also learn about SLA research methods, for example, research replication and conducting interviews. They engage in hands-on research, such as textbook analysis and duoethnographic research conducted in pairs. One of the goals of this course is to prepare students for independent research in the following year.

Fourth-Year Seminar

In this seminar, students write their graduation theses in English on topics they choose themselves. They improve their knowledge of writing conventions and engage in peer feedback. Recent projects have examined motivation, study abroad, identity, emotions, textbooks, language testing, and the role of technology in English education. Although the topics vary widely, students share a common goal: to understand language learning in relation to society and lived experience. 🌸

橋本 ナターシャ HASHIMOTO Natasha

人文学科 英語圏文化専攻 准教授

BA from Tokyo University of Foreign Studies; Master's degree from Arizona State University; PhD (Education, concentration in Applied Linguistics) from Temple University. Joined Tokyo Woman's Christian University in 2018.

第40回「女性史青山なを賞」受賞作決定

女性史研究に先駆的業績を残された故青山なを氏のご遺贈による基金に基づき、東京女子大学女性学研究所より1986年に創設された「女性史青山なを賞」。40回目となる今回は1作品に決定いたしました。

講評執筆者
第40回「女性史青山なを賞」学外選考委員/
国際日本文化研究センター 教授

榎本 渉 ENOMOTO Wataru

受賞作

中世日本研究所 編、モニカ・ベーテ 監修

モニカ・ベーテ、パトリシア・フィスター、原田正俊、米田真理子、カレン・ゲーハート、バーバラ・ルーシュ 著

『無外如大尼 生涯と伝承 中近世の女性と仏教』

(思文閣出版 2024年3月30日)

本書は中世の尼僧無外如大(1223~98) および関連の文化財を扱う論考を集めた論文集である。コロンビア大学中世日本研究所名誉教授のバーバラ・ルーシュ氏は、かつて1980年代初頭のある日、写実的な如大の頂相彫刻(京都市宝慈院所蔵、14世紀作か)の写真を見て衝撃を受けた。それまで如大の名前すら聞いたことがなかったルーシュ氏は、恩師たちに欺かれていたと感じるとともに、日本仏教における女性の居場所に無自覚だった自分を恥じたという。この如大の「再発見」が、40年以上を経てこのたびの本書の刊行につながった。

実際のところ日本人でも、如大と聞いてピンと来る者は多くないだろう。京都の尼五山第一位景愛寺を開いた尼僧という立派な肩書にもかかわらず、中世日本仏教史ではほぼ言及されないのが現状である。本書はそうした歴史の常識的語りにおける女性の不在を気付かせてくれる好著でもある。

ルーシュ氏は1993年に京都で如大および京都の尼門跡寺院の研究プロジェクトチームを立ち上げ、モニカ・ベーテ氏やパトリ

シア・フィスター氏ら後進の研究者たちと共に寺院資料の調査を行い、研究成果の発信を続けた。本書の意義の一つとして、古文書・典籍・袈裟・絵画・彫刻等、他書で見ることが困難な資料をカラー図版で収録することがあるが、これも長期の資料調査によって実現したものである。外国人が寺院の信頼を得て調査を行うことが容易でなかったことは想像に難しく、これを実現した熱意には日本人としても敬服するほかない。

本書にはアメリカ出身の美術史家たちが名を連ねる他、日本からも中世仏教史研究の原田正俊氏と中世仏教文学研究の米田真理子氏が加わり、複数の国籍・研究分野の専門家の議論を踏まえた国際的・学際的な研究書となっている。本書に載せる論考・解説が全て日英両語で収録されていることも注目される。本書の刊行は日本中世女性史の発展に寄与するのみならず、日本中世女性史研究の可能性を国際的に発信するものとしても貴重な成果である。🌸

第41回「女性史青山なを賞」2026年度候補作を公募します

本賞は、女性史研究の奨励的意義および女性史に関する啓発的意義や、独創性・論理の一貫性・実証性の各要素を満たす候補作から、選考、授与されるものです。

対象 日本語で著され出版された女性史研究の単行本(著者の年齢・性別・国籍は不問。ただし2025年1月1日から2025年12月31日までに公刊されたものに限る)
副賞 20万円
締切 2026年5月15日(金)16時

発表 2026年10月予定
応募方法 ①著者名②書名③発行所④発行年月日⑤推薦者の住所・氏名(所属)・電話番号・メールアドレスをご記入のうえ、irowg@gr.twcu.ac.jpまでお送りください。(自薦、他薦を問いません。また可能な場合は、推薦図書のお寄せをお願いします)

お問合せ irowg@gr.twcu.ac.jp
(女性学研究所内「青山なを記念基金運営委員会」)



退職者メッセージ



目立ってなんぼのゼミ

人文学科 日本文学文化専攻 教授

篠崎 晃一 SHINOZAKI Koichi

前任校の改革の混乱を避けるように本学に移ってまいりましたが、本学の改革のタイミングで定年を迎えるというも何か因縁めいたものを感じます。移籍当初は大学院から学部へと重点がシフトしたこともあり、戸惑いもありました。まず取り組んだのは、ゼミを誰にとっても居心地の良い場にするごでした。具体的には目立ってなんぼのゼミを目指し、共同研究の成果を「出身地鑑定方言チャート」という形で社会に発信していききました。世間で注目されることで学生の研究意欲も高まり、お互いのきずなも深まったのではないかと思います。また、苦手な学内の役職をどうにかこなすことができたのは、学科専攻を超えた若手教員の皆さんとのつながりや事務職員の方々との密なコミュニケーションに支えられたおかげだと感謝しています。🌸



ぼくは女子大のアイドルだった？

国際社会学科 教授

湯浅 成大 YUASA Shigehiro

東京女子大学は昔も今もさまざまなアイドルを輩出してきました(と思います)。かく言うこの私にも、かつてこんなことがありました。東京女子大学に着任して数年たった頃、新人歓迎立食パーティーの席で、さる事務職員の方が新人職員に向かって、私のことを「この人はアイドルみたいな人です」と紹介したのです。そのときは軽いジョークだと思って聞き流していたのですが、でもカン違いしちゃうんですね(「他人の評価が本当の評価」...野村監督)。今改めて思います。あのときの言葉は、アイドルidolではなく、アイドルidle:怠惰、だったんですね。これなら納得です。私は自分をアイドルだとカン違いしたまま30年近く過ごしてしまいましたが、それを温かく見守ってくださった全ての教職員の方々に感謝です！ありがとうございました。🌸



感謝を込めて

社会コミュニケーション学科 教授

曾我 芳枝 SOGA Yoshie

東京女子大学とのご縁は、1994年牟礼キャンパスから始まりました。その後一つのキャンパスになり、新校舎・新体育棟建設、グラウンドの芝の整備など少しずつ変化があり、伝統の面影を残しながら美しくなっていく大学と共に歩んでまいりました。その間、運動を通して学生たちと共に学び、笑い合い、感動の涙ありの32年間(非常勤を含め)でした。

そして大学のご支援により国際学術交流費を使わせていただき、ヨーロッパ各地で4年ごとに開催される「世界体操祭」に日本代表として6回連続して発表ができたことは忘れられない貴重な体験となりました。

緑豊かなキャンパスで小鳥たちのさえずりに癒やされ、教育をはじめ研究に打ち込むことができましたこと、これも同僚の方々の激励、事務職員の方々のサポートそして、学生たち、多くの皆さまのおかげと感謝いたしております。大学のさらなる発展と皆さま方のご健康を祈念して、お別れの言葉といたします。🌸

2026年度 学年暦

2026年度現代教養学部学年暦および大学院学年暦が決まりました。本学公式サイトよりご覧ください。



学年暦・キャンパスカレンダー

文科省採択「東女リカレント」による社会人向けプログラム
2025年度活動報告

東女リカレントは、2025年度に文部科学省「リカレント教育エコシステム構築支援事業」に採択され、始動した産学連携の社会人向け教育プログラムです。本学エンバワメント・センターを中心に、事業開発×人材・組織マネジメント×リベラルアーツを融合したオンライン講座を展開しています。昇進や社内公募など新たな挑戦に踏み出すための戦略的思考力と実践力を養成します。全3回開催した今年度のプログラムの特徴は、森本あんり学長による「正統と異端」、小西由樹子准教授(経済経営学科)による「リーダーシップにおける見えない壁」など、リベ

ラルアーツと実践的ビジネススキルを融合させた独自のカリキュラムにあります。7社の企業から派遣された受講生の方々からは、「宗教・哲学と経営学を組み合わせた内容が新鮮で、日常業務ではあまり使わない思考力を鍛えられた」「他社の参加者とのディスカッションを通じて、視野が大きく広がった」といった声が寄せられ、非常に好評を得ています。



採択について

https://www.twcu.ac.jp/main/topics/2025/0703_01.html

謹弔

哀悼の意を捧げます。

島 美喜子 先生

2025年9月25日ご逝去 96歳

1965年4月 文理学部 一般教育(化学) 専任講師就任
1972年4月 文理学部 一般教育(化学) 教授就任
1997年3月 文理学部 自然科学系研究室(化学) 定年退職
文理学部教務部長、文理学部一般教育科目主任などを務められ、
本学の教育に大きく貢献された。



島美喜子先生を偲んで

情報数理科 助手 渥美 みはる ATSUMI Miharuru

初めて島美喜子先生の研究室を訪れたとき、充実した研究設備に感動しました。先生がご着任された当初は、研究室にはほとんど何もなかったそうですが、実験に必要な装置をそろえて充実した設備の整った研究室を築き上げられました。ご専門は高分子の溶液物性で、測定用の試料を合成するためにアメリカで高度なガラス細工の技術を習得されました。先生が作られた装置は継ぎ目が分からないほど美しいものでした。筆者はガラス細工がご縁で助手に採用されましたが、ガラスの継ぎ目がくっきり残っていて、先生からはいつも「火が弱すぎる」と注意されていました。

先生は話題が豊富で、専門外のことにも精通し、先生のお話からさまざまなことを学びました。ご在職中は女性研究者の支援と地位向上に尽力され、退職後もその活動を続けられました。2010年には瑞宝中綬章を受賞され、研究室の卒業生と元教職員もお呼びして祝賀会を行いました(写真)。久しぶりにお会いした先生は、若々しく、お元気でした。今も実験室の片隅にあるガラス細工の設備を見るたびに先生の颯爽とした姿を思い出します。

哀悼の意を捧げます。

石井 紀子 先生

2026年1月2日ご逝去 65歳

2025年4月1日 現代教養学部 国際社会学科 特任教授就任



石井紀子先生を偲んで

国際社会学科 一同

天上におわす石井先生。先生が教育してくださった4年生ゼミの学生の卒業論文は、いずれも力作でした。先生のお優しく朗らかなお人柄を思い出すたびに、教員も学生も心に穴が空いたようで、悲しいばかりです。先生のゼミ生だったある学生が「私どうなるのでしょうか」と尋ねてきました。「大丈夫。石井先生がお見守りくださいますよ。」と応えつつ、こう言わなければならない現実が受け止められません。先生、どうぞ安らかに眠ってください。

NOTICE

次期学長決定

森本あんり学長は2026年3月31日をもって任期満了により退任いたします。次期学長は、太田邦史氏に決定いたしました。任期は2026年4月1日から2030年3月31日までの4年間です。

REPORT

クリスマス献金報告

皆さまからお献げ頂いたクリスマス献金は、以下の団体に送金いたしました。ご協力ありがとうございました。

Table with 2 columns: 送付先, 総額. Includes (キリスト教センター) 387,673円 and various organizations like 小羊学園, カレーズの会, etc.

NOTICE

遺贈・相続財産によるご寄付について

■遺贈によるご寄付について

本学の遺贈による寄付制度はあらかじめ作成した遺言書に基づき、逝去されたときに財産の一部を本学に寄贈いただきます。教育研究活動の財源として活用させていただきます。相談窓口として、信託銀行をご紹介します。なお、本学にご遺贈いただいた財産に相続税は課税されません。

■相続財産のご寄付について

財産の相続または遺贈を受けられた方が、本学に当該財産をご寄付された場合、相続税法上の優遇措置を受けることができます。詳細は、事務局へお問い合わせください。

問い合わせ先

大学運営部総務課(寄付担当) TEL:03-5382-6340

REPORT

ご支援へのお礼

多数のご寄付をいただき、ありがとうございました。ご芳名のWEBへの掲載は控えさせていただきます。

NOTICE

2025年度異動

- 任期満了(2026年3月31日付) 森本 あんり 学長
●定年・定年扱退職(2026年3月31日付) [教育職員] 湯浅 成大 国際社会学科 教授
●退職(2026年1月2日付) 石井 紀子 国際社会学科 特任教授
●退職(2026年3月31日付) 高柳 妙子 社会コミュニケーション学科 特任准教授

OTHERS

広報誌『VERA』定期購読のご案内

東京女子大学広報誌「VERA」は、学内配布の他、学部在学生の保証人の皆様、定期購読をお申し込みくださった方にお送りしています。定期購読をご希望の場合は、下記の通りお手続きくださいますよう、何卒よろしく願い申し上げます。

●年間購読料

1,300円(2026年度は年3回、6月、12月、3月発行予定、送料込)

●申し込み方法

郵便局に備え付けの「払込取扱票」を使用して、右記口座にお振り込みください。通信欄に「広報誌購読料」と記載の上、住所、氏名、電話番号、および卒業された学科・専攻名、卒業(修了)年をご記入ください。

送金先(ゆうちょ銀行)

口座記号・番号:00130- 5- 34872
口座名義:学校法人 東京女子大学

*申し込みは随時承っておりますが、年度1号からご購読をご希望される場合は、2026年4月24日(金)までにお振り込みください。

*定期購読は年度単位(4月から翌年3月まで)となっております。

年度途中にお申し込みの場合は当年度第1号からのバックナンバーもお送りいたします。

*記事内容は東京女子大学公式サイトでも公開しています。



同窓会からのお知らせ

卒業される皆さまへ
ご卒業おめでとうございます。

ご卒業後の4月から、皆さまは東京女子大学同窓会の会員となります。同窓会には善福寺の本部の他、国内に53支部、海外に7支部があります。同窓会が主催する行事やイベントの詳細は、ホームページでご覧いただけます。なお、改姓や住所変更などが生じた場合は、ホームページの専用ページよりお知らせください。メールでの連絡も受け付けております。

Tel. 03-3395-4448
Fax. 03-3395-0084
https://www.twcu-alumnae.jp/
E-mail: office@twcuaa.jp
X(旧Twitter): @vera_twcu
Instagram: @twcu.alumnae
開館日: 火~土 9時~17時 祝日休館
〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-23-11
同窓会館(72年館)はグラウンドの向こう側に見える白い建物です。



同窓会 ホームページ

同窓会は、同窓生の親睦をはかるとともに、母校を支援するために活動しています。

年間の主な行事・イベント

- 定時総会 2026年は6月13日(土)開催
●節目の学年会 卒業後10年・20年・30年・40年の会、卒業後50年お花見の会
●園遊会(Garden Party) 2026年4月29日(水・祝)
●講座および講習会 前期/後期キリスト教講座、継続講座(パソコン・いけばな・英会話)
●観劇など 歌舞伎、文楽、ミュージカル、コンサートのチケット斡旋
●情報発信 『同窓会会報』(毎年9月)、「荻窪だより」(3月、9月)、公式ホームページ、公式X(旧Twitter)、公式Instagram、メールマガジン
●オリジナルグッズ制作販売 クリアファイル(各種)、FEILERオリジナルハンカチ、VERAバッグ、ランチバッグ、Tシャツ、オリジナル印傳グッズなど
●貸室(72年館) クラス会、勉強会、発表会、音楽会、結婚披露宴などにご利用ください。
●同窓会費 年額3,500円(2026年より) 卒業後10年分は、卒業時に大学を通じて納めていただいています。11年目から忘れずに納入してください。



表紙の場所

講堂。アメリカの女性たちや本学卒業生、在学生の父母などの寄付を得て、チャペルと講堂を組み合わせた建物が誕生しました。木の温かい質感が印象的な講堂は、扇形のステージと、約1,000もの座席を有しています。入学式、学位授与式、講演会といった学内のさまざまなイベントが行われ、秋には大学祭（VERA祭）の会場としても使用されています。

竣工年：1938（昭和13）年
設計：アントニン・レーモンド
■文化庁登録有形文化財
■1992年（平成4）年BELCA賞（ロングライフ・ビルディング部門）受賞

VERA ネーミングの由来

『VERA』はラテン語で「真実」を意味します。本学の本館に刻まれている「QUAECUNQUE SUNT VERA」（すべて真実なこと）は新約聖書「フィリピの信徒への手紙 第4章8節」の中の聖句の一節で、自由な学問の場としての本学を表しています。広報誌『VERA』により、真理の探究の場である本学の「いま」、学生、教育、研究、卒業生の「いま」を伝えることを使命として、教職員および学生への公募の結果、新たな名称として採用されました。

Web アンケート



『VERA』に関するご意見、
ご要望をお寄せください。
QRコードよりご入力ください。



VERA

第3号／2025年度

Contents

02 SPECIAL FEATURE

東京女子大学学位授与式 学長告辞
—時代に抗して信仰と希望と愛の挑戦を—
……森本 あんり

04 Students

学びを終えて 学部卒業生のメッセージ
……田中 杏奈、橋本 遥、窪川 葵、守屋 京奈、
呉 恩愛、西 咲良、末岡 美樹、安田 日菜乃、
渡邊 香苗、柳澤 奈央、新國ゼミ、青江 あかり

06 Students

学びを終えて 大学院修士課程生のメッセージ
……堀江 結衣、大槻 栞、松本 佳菜子、荒木 貴絵
博士後期課程修了者—博士論文/
2025年度 各賞受賞

08 Career

TWCU OG TALK vol.18……小泉 晶子さん
就職内定者INTERVIEW

10 Studies

ゼミの小窓 第17回……橋本 ナターシャ
第40回「女性史青山なを賞」受賞作決定
中世日本研究所編、モニカ・ベアテ監修
モニカ・ベアテ、パトリシア・フィスター、原田正俊、
米田真理子、カレン・ゲーハート、バーバラ・ルーシュ著
『無外如大尼 生涯と伝承 中近世の女性と仏教』
……国際日本文化研究センター 教授 榎本 渉

12 TOPICS

退職者メッセージ……篠崎 晃一、湯浅 成大、
曾我 芳枝/
2026年度 学年暦/
文科省採択「東女リカレント」による
社会人向けプログラム 2025年度活動報告/
謹弔

14 NEWS

次期学長決定／クリスマス献金報告/
遺贈・相続財産によるご寄付について/
ご支援へのお礼／2025年度異動/
広報誌『VERA』定期購読のご案内/
同窓会からのお知らせ

